

函館市小学校体育研究会

1 研究構造について

< 函館支部 研究主題 >

運動に魅力を感じ、自ら学び、高め合う体育活動の創造
～生涯スポーツを目指したカリキュラムの実践を通して～

< 目指す子ども像 >

「かかわりの中で主体的に運動に取り組む子」
運動に夢中になって取り組む子 仲間と学び合い伝え合う子 運動課題の解決を目指して努力する子

< 具現化に向けて >

- 子どもの発達の段階や運動の様相を踏まえたカリキュラムの実践・検証・改善
- 系統的な「学び方」の指導→グループ学習を中核とした学習展開
- 学びを支える授業づくり→学習資料の提示、子どもの実態に応じた場の設定、自己評価と相互評価

< 30年度の重点活動 >

- ① 「函館の体育」の学び、共有、実践～『グループ学習』を中核に
- ② 中学校との連携
- ③ 全道大会渡島大会への積極的参加

2 授業実践報告

・平成31年2月8日(金)

函館市立北星小学校：前田教諭 4学年『キャッチバレーボール』

今回の北星小学校での授業研究の視点は、上記重点活動①の『「函館の体育」の学び、共有、実践～「グループ学習」を中核に』に基づいて進めた。函館市小学校体育研究会において、会員の異動などにより人数が減少し、授業を公開する研究員が少なくなってきたのが喫緊の課題である。しかし、諸先輩方が積み上げてきた実践研究は、確かなものである。その積み上げてきた研究実践を、いかに我々若手教員が継続し、そして、21世紀を生きる子どもたちに合わせ、新たな体育活動に挑戦したり上乗せしたりすることを、大きな目標として取り組みを進めた。

< 授業研究のポイント >

① 研究内容を、ゲームとゲームの間に設定

学習の道すじ (全7時間 本時5/7)

	1	2	3	4	5	6	7
学習内容	オリエンテーション	ねらい① キャッチ・トス・アタック でゲームを楽しもう！ (総当たり戦)			ねらい② 得点の取れる攻め方を工夫 して、勝利を目指そう！ (総当たり戦)		
	○学習の進め方を知る ○キャッチバレーのルールを確認する。						

我々は、ゲーム中心の活動の中で「グループ学習」という学習形態を取り入れることによって、子どもたちが互いに高め合う授業を行ってきた。この、「グループ学習」の効果をより一層高めるために、5時間目にあたる「ねらい②の最初の時間」において、自己評価・相互評価の観点から、自グループのできていること(子どもたちへは：すごい)と、できていないこと(子どもたちへは：まだまだ)を振り返らせ、個や集団の高まりをめあてにした授業を行うことで、ねらい②におけるゲームが、より一層深いものになるのではないかと検証を行うこととした。

② 教師のかかわりと、学びを支えるもの

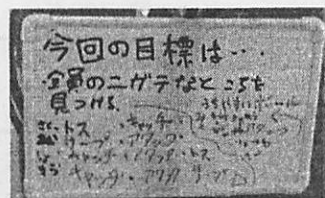
子どもたちにとって、更に自分のチームを高める「時間」を設けることにしたが、その時間が子どもたちにとって有効に作用しなければならない。ポイントとなるのが、教師のかかわりと1時間目からの「学びのストック」である。そこで、1時間目から、エポリューションシート（自己評価を付箋に書かせて可視化したもの）を児童全体へのこつや解決すべき問題として還元することで、各グループが課題意識をもって自主的に練習内容を考えるようにした。また、ねらい①の総当たり戦での勝敗結果や、グループごとの練習内容や子ども（グループ）の動き、そのグループにあった支援など、教師のかかわり方についても重要なことと位置付けた。



加えて、学び合う雰囲気づくりのために子ども自身の声を出させることも意識した。「ドンマイ」などの決まった声だけではなく、「～した方がよいか」などと、より具体的な心からの声、得点を取った時に喜び合う姿などを通して、バレーボールの楽しさに存分に浸らせようと考えた。

③ 事後検討会より（主なものを抜粋）

- ・子どもたちが、自分から取り組んでいきたいという姿勢が見られた。
- ・子どもたちに目的意識がはっきりと見られ、主体的・対話的な学びが展開されていた。あるチームは、「誰のトスが、一番打ちやすいか」を検証する練習を行っていた。
- ・子どもが練習、作戦会議、練習試合をチームの状況に合わせて選択でき、活動する場を十分に保障しているため、必要感のある学びになったのではないか。
- ・付箋の活用として、解決した課題はチームのよさに貼り直すなどすると、達成感もてるのではないか。
- ・体育館がエネルギーに包まれていた。まさに、心と体が解放されていた。メリハリもあり、無駄がなかった。子どもたちが、自発的、自主的であった。



3 30年度の成果と課題（一部を抜粋）

① 「函館の体育」の学び、共有、実践の視点より

- 今年度も、3本の授業を行っていただき、研究を深めることができた。特に、今年度はグループ学習を中心にした授業を展開していただいたが、函館の研究をもとにした素晴らしい授業を見せていただき、函館実践の素晴らしさを改めて感じることができる授業研究であった。また、研究授業において、試合や発表会ではなく、そこに至るまでの、子どもたちが試行錯誤しながら学びに向かっている時間を公開するのも、前向きで素晴らしい取り組みであった。
- 平成20年度からの紀要に掲載されている公開研究授業と研究資料の一覧を作成することで、過去の実践内容が一目でわかり、現職の先生方が参考にしやすい環境を整えることができた。
- 『フロー図』『グループ学習の展開例』について検討する必要があるものがある。新学習指導要領を加味し、先輩方が積み上げてきた研究実践、授業実践を少しでも形あるものとし、これからの先生方にも生かしてもらうことで、子どもたちの楽しい体育につなげることができるよう、研究内容1のモデルカリキュラムづくりをこれからも進めていく必要がある。

② 中学校との連携での視点より

- 11月に桔梗中学校で授業を見させていただくことができたのは大きな成果であった。特に、桔梗小・中学校で、『表現』を軸にし、連携して授業実践を行えたことは、学びの連続性、指導方法など、今後につながる非常に大きな成果であった。また、授業研修にもたくさんの先生方が見に来てくれた。今後も、より一層の連携を目指していきたい。

③ 全道大会渡島大会への積極的参加の視点より

- 渡島大会への参加も、若い先生方も含めて、例年よりたくさん参加できたことが良かった。ぜひ、釧路大会にもたくさんの参加を募っていきたい。